

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅患者の終末期における口腔ケア ～最期まで快適な口腔で、人としての尊厳を保つ～
演者名	山口 朱見 (やまぐち あけみ)、川越 正平 (かわごえ しょうへい)
所属	あおぞら診療所

目的

終末期では、特に在宅において、患者の身体的・精神的変化の対応に追われ患者の口腔に意識が及ばない、ケアが難しく上手く出来ないなど口腔ケアが十分行われていないことが多いと思われる。最期まで口腔状態が良好に経過するにはどの時期にどんなアプローチが効果的であるかを考える。

実践内容

平成 24 年から平成 26 年 8 月までに当診療所で看取った患者の中で歯科衛生士が、亡くなる 1 カ月以内に口腔ケアに関わった方 46 名について、口腔ケア実施状況、セルフケア困難になった時期等、カルテを見返す形で調査した。

実践効果

歯科衛生士が 46 名全員に対し毎日口腔ケアが行われるよう患者、家族、訪問看護師等それぞれ適切な者に口腔ケアの方法を伝えた。セルフケア困難になりつつある時点または困難になった直後に介護者口腔ケアを開始、継続した者は最期まで比較的良好な口腔状態が保て(33 名)、一度困難になった経口摂取が可能となる場合もあった(15 名)。しかしセルフケアの時点ですでに状態が悪い、セルフケア困難で口腔状態が劣悪になるまで経過してしまったケースでは介護者口腔ケアが困難で口腔内が不良な状態で亡くなる者がいた(13 名)。

考察

終末期には全身状態の悪化と共に、放置された口腔は劣悪になって行く場合が多かった。その中で歯科衛生士と家族、多職種が連携しケア方法が伝達、継続された者は最期まで良好な口腔状態を保てており、セルフケア困難になりつつある時点で歯科専門職が適切な方法を伝え介護者口腔ケアを開始し、口腔ケアが途切れず行われることが必要であると考えられた。またセルフケアの時点で問題があるものには早期から歯科専門職が介入し口腔状態を良好にしておく必要があり、終末期以前の口腔管理も重要と思われた。終末期に最期まで口腔が快適に保たれることは人としての尊厳を保つことになるであろうことを伝えたい。